

会 報

No. 31 (1988年11月)

目 次

- ◆第11回日本分子生物学会年会のお知らせ…………… 1
- ◆昭和62年度会計収支決算報告…………… 1
- ◆会計監査報告…………… 2
- ◆会員名簿発行について…………… 2
- ◆各種研究助成などの本学会推薦結果…………… 2
- ◆ブレインサイエンス振興財団より…………… 3
- ◆新化学発展協会より…………… 6
- ◆「大学と科学」公開シンポジウム…………… 7
- ◆日本学術会議だより (抜粋) …………… 8

日 本 分 子 生 物 学 会
(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

◆第11回日本分子生物学会年会のお知らせ

年会のプログラムが印刷できましたのでお届けいたします。尚、年会についてのお問い合わせ、ご連絡は下記宛にお願いいたします。

〒113 東京都文京区本郷2-40-14

(財)日本学会事務センター

学術講演会業務部

第11回日本分子生物学会年会係

電話 (03) 817-5831

◆昭和62年度会計収支決算報告

昭和62年度会計収支は以下の通りになりましたので報告いたします。

会計幹事 山本正幸

[I] 収入の部

| 摘要 | 金額 |
|----------------|------------|
| 1. 学会費(含入会金) | 6,693,800 |
| 2. 賛助会費 | 1,050,000 |
| 3. 寄附金(第10回年会) | 1,000,000 |
| 4. 雑収入 | 27,000 |
| 5. 預金利息 | 119,986 |
| 6. 繰越(前受会費除く) | 5,300,991 |
| 7. 前受会費 | 214,000 |
| 総計 | 14,405,777 |

[II] 支出の部

| 摘要 | 金額 |
|----------------|------------|
| 1. 事業費 | 2,161,870 |
| 会報発行 | 596,000 |
| 第10回年会プログラム | 352,370 |
| 第10回年会特別講演謝金 | 200,000 |
| 第11回年会補助 | 1,000,000 |
| その他 | 13,500 |
| 2. 評議委員会費 | 387,960 |
| 3. 学会センター業務委託費 | 3,104,083 |
| 4. 一般事務費 | 1,849,955 |
| 用品費 | 18,460 |
| 印刷費 | 58,620 |
| 通信費 | 1,634,205 |
| 事務謝金 | 135,000 |
| その他 | 3,670 |
| 5. 繰越(前受会費含む) | 6,901,909 |
| 総計 | 14,405,777 |

◆会計監査報告

昭和63年5月27日、会計簿、預金通帳、領収書、学会センター出納記録などの監査を行い、決算に誤りのないことを確認しました。

日本分子生物学会会計監査

飯野 徹 雄 ㊦

深沢 俊 夫 ㊦

◆会員名簿発行について

会報No.30でもお知らせしましたように、日本分子生物学会会則第11条と同細則第7条によって、第6回評議員選挙が来年3月に行なわれます。この選挙のための会員名簿（今年12月現在のデータをもとに作成）を発行予定ですので住所変更などの異動があった会員は速やかに事務局までお知らせくださるようお願いいたします。

◆各種研究助成などの本学会推薦結果

昭和63年度井上学位賞候補として本学会選考委員の意見にしたがい下記一件を推薦した。

池田日出男（東大医科研・教授）「遺伝子の導入及び組換えに関する研究」

同じく昭和63年度日産学位研究助成候補として下記五件を推薦した。

岡山 博人（阪大微研・教授）「動物細胞及び分裂酵母菌を宿主にするcDNA発現クローニングシステムの開発とこれを用いた細胞増殖の分子機構の研究」（一般研究A）

有賀 寛芳（東大医科研・助手）「核内癌遺伝子産物によるDNA複製と転写の調節機構」（一般研究A）

牧野 耕三（阪大微研・助手）「環境変化に対する細胞の適応応答—大腸菌リン酸レギュロンの遺伝子発現調節機構」（奨励研究）

田代 康介（九大理・助手）「細胞増殖制御因子TGF-bの活性調節機構」（奨励研究）

谷 時雄（九大理・助手）「神経細胞における選択的スプライシング機構の研究」（奨励研究）

同じく1988年度東燃研究奨励賞候補者として下記二名を推薦した。

大野 睦人（京大・理）「mRNA スプライシングにおけるキャップ構造の役割の研究」

渡部 邦彦（京府大）「比較に基づく蛋白質耐熱性の分子生物学的研究（プロリン残基に注目して）」

同じく1988年度協和発酵加藤記念研究奨励賞候補者として下記二名を推薦した。

宇佐見昭二（名大・理）「クラウンゴール腫瘍形成の分子機構の研究（Agrobacterium から植物細胞への T-DNA 転移を誘導する植物物質）」

広田 美子（京大・化研）「細胞のトランスフォーメーションと遺伝子発現の制御」

山田科学振興財団より、大島靖美（九大・理）「mRNA スプライシングにおける RNA シグナルの識別機構」及び、岡 穆宏（京大・化研）「Agrobacterium 菌による植物腫瘍形成の分子機構」の二件に対して1988年度山田科学振興財団研究奨励金が送られるとの連絡があった。

◆ブレインサイエンス振興財団より

昭和63年度第3回研究助成候補者推薦要領

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野（脳神経に関する自然科学的研究をすべて含む研究領域）において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。候補者は単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。

2. 研究助成金

助成額は1件100万円、助成件数は6件以内とする。

3. 推薦者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1 推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団あて送付する。（複写用紙を用いてもよい）

6. 推薦締切日

昭和63年12月20日（火）とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会で決定する。

8. 採否の通知

昭和64年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、昭和64年5月末までに研究助成金を送呈する。

10. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。万一途中で使途を変更する場合には、その旨あらかじめ申し出て、当財団の承認を求めること。

11. 成果の報告

研究の成果については、昭和65年3月末までに成果報告を当財団に提出するものとする。(記載例および原稿用紙は当財団から送付する。)助成金による研究を専門誌に発表する場合には、“財団法人ブレインサイエンス振興財団(英文の場合は、Brain Science Foundation)の助成による”旨を書き添えること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団
〒104 東京都中央区八重州2丁目6番20号
電話 (03) 273-2565 (直通)

昭和63年度第3回塚原仲晃記念賞受賞候補者推薦要領

1. 趣 旨

生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者(国内外を問わない。)に対して塚原仲晃記念賞を贈呈する。

2. 褒賞金

贈呈件数は1~2件とし、賞牌ならびに副賞(100万円)を贈呈する。

3. 推薦者

- (1) 関係学会代表責任者または所屬機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団あて送付する。(複写用紙を用いてもよい。)

6. 推薦締切日

昭和63年12月20日(火)とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会で決定する。

8. 選考結果の通知

昭和64年3月末までに推薦者および受賞者あて通知する。

9. 塚原仲晃記念賞の贈呈その他

贈呈決定者に対して、別途通知する。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団
〒104 東京都中央区八重州2丁目6番20号
電話 (03) 273-2565 (直通)

昭和63年度海外研究者招聘助成候補者推薦要領

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘(旅費または滞在費)を助成する。

ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。

2. 招聘の時期

昭和64年4月1日から昭和65年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。

3. 助成予定額

- (1) 予算として100万円を計上している。
- (2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃または滞在費とし、50万円までを限度として必要額を助成する。

4. 推薦者
 - (1) 関係学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。
 - (2) 当財団の理事および評議員とする。
5. 推薦件数

1 推薦者から 1 件に限る。
6. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団あて提出する。(複写用紙を用いても良い。)
7. 推薦締切日

昭和63年12月20日(火)とする。
8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会で決定する。
9. 採否の通知

昭和64年3月末日までに推薦者に通知する。
10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、昭和64年4月から必要に応じて受入責任者に送呈する。
11. 助成金の使途

外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。万一途中で使途を変更する場合には、その旨あらかじめ申しでて当財団の承認を求めること。
12. 成果の報告

招聘の成果について、招聘後2ヶ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団
〒104 東京都中央区八重州2丁目6番20号
電話 (03) 273-2565 (直通)

昭和63年度海外派遣研究助成候補者推薦要領

1. 趣 旨

我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。

ただし、昭和64年4月から昭和65年3月の間に出発出来るものに限る。
2. 助成予定額
 - (1) 予算として100万円を計上している。
 - (2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、50万円を限度として若干件を助成する。
3. 推薦者
 - (1) 関係学会代表責任者または所属機関の長とする。
 - (2) 当財団の理事および評議員とする。
4. 推薦件数

1 推薦者から 1 件に限る。
5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団あて提出する。(複写用紙を用いても良い。)
6. 推薦締切日

昭和63年12月20日(火)とする。
7. 受入先の承諾書

受入先の承諾書(学会、シンポジウム等参加の場合は、参加証明書または招待状の写を、短期の共同研究の場合は、受入機関または共同研究者の手紙の写)を添付すること。

8. 選考の方法
選考委員会において選考し、理事会で決定する。
9. 採否の通知
昭和64年3月末までに推薦者に通知する。
10. 助成金の交付
助成決定者に対しては、昭和64年4月以降に出発時期に応じて送呈する。
11. 助成金の使途
助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。万一途中で使途を変更する場合には、その旨あらかじめ申し出て、当財団の承認を求めること。
12. 成果の報告
帰国後2カ月以内に派遣の成果について、報告書を当財団に提出すること。
推薦書提出先および連絡先
財団法人 ブレインサイエンス振興財団
〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号
電話 (03) 273-2565 (直通)

◆新化学発展協会より

研究奨励金の交付と研究計画の募集について

社団法人 新化学発展協会においては、基礎研究の推進と研究者の育成を通じて新化学の発展を図るため、今年度から新化学の発展に資する若手研究者の研究に対し、概要下記の通り、研究奨励金を交付することと致しました。研究奨励金の交付を希望される方は、下記の課題の中から1つを選んで研究計画を作成し、略歴、既発表論文の一覧表とともに協会事務局まで提出して下さい。(詳細は、新化学発展協会までお問い合わせ下さい。)

記

1. 研究課題
①老化に関する基礎研究 ②人工レセプターの研究 ③有機超伝導材料の研究
④可逆色素系メモリー、ディスプレイ材料の研究 ⑤画期的な分離技術
⑥分離機能を有する触媒システムの設計と応用 ⑦耐熱・高強度無機繊維の研究
⑧有機分子精密高次構造配列制御技術
2. 応募資格
大学等における研究者であって、39歳以下の者(昭和24年4月1日以降に出生した者)
3. 件数及び金額
原則として各課題毎に1件、1件につき150万円
4. 条 件
1～2年以内に協会の研究会等で研究成果を報告する。
5. 応募の締切り及び交付の時期
応募の締切り 64年2月末日 奨励金の交付 64年6月予定
6. 応募及び問い合わせ先
〒102 東京都千代田区麴町3-5-1 泉屋東京店ビル2号館
社団法人 新化学発展協会 研究奨励金係
電話 03-239-3341

◆「大学と科学」公開シンポジウム

『脳のメカニズム—機能分子と記憶』

昭和64年1月19日(木) 日経ホール(千代田区大手町1-9-5)

A. 挨拶 (9:20~9:30)

第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
文部省

B. 特別講演 (9:30~10:30)

脳のメカニズムは如何にして解明されるか

司会 京都大学教授 井村 裕 夫

東京大学教授 伊藤 正 男

C. 脳の機能分子 I (10:40~12:40)

司会 京都大学教授 井村 裕 夫

1. 神経活性物質研究の発展

大阪大学教授 吉田 博

2. 神経伝達物質受容体およびイオンチャンネルの構造と機能

京都大学教授 沼 正 作

D. 脳の機能分子 (14:00~17:10)

司会 大阪大学教授 吉田 博

1. グルタミン酸受容体をめぐる新知見

岡崎国立共同研究機構助教授 杉山 博 之

2. 脳神経で作物する生理ペプチド

宮崎医科大学教授 松尾 壽 之

3. 神経ペプチドの生理的・臨床的意義について

京都大学教授 井村 裕 夫

昭和64年1月20日(金)

E. 脳のメモリー要素としてのシナプス可塑性 (9:30~12:30)

司会 京都大学教授 久保田 競

1. シナプスの可塑性とグルタミン酸受容体

大阪大学教授 津本 忠 治

2. 蛋白キナーゼC

神戸大学教授 田中 千賀子

3. G蛋白

東京大学教授 宇井 理 生

F. 記憶・学習の神経機構 (14:00~17:10)

司会 大阪大学教授 津本 忠 治

1. 大脳のメモリーニューロン

東京大学講師 宮下 保 司

2. 記憶と行動—サルの前頭連合野の役割—

京都大学教授 久保田 競

3. 認知と記憶

日本大学教授 大山 正

◆日本学術会議だより No. 10 (抜粋)

日本学術会議第 105 回総合報告

7月22日の第14期の発足に伴い、同日付で内閣総理大臣による日本学術会議会員の発令が行われた(辞令の交付式は、総会日程の関係で7月25日に挙行。)第14期の会員は、選出制度が学術研究団体を基礎とする推薦方式が変わって後、2回目の会員である。この第14期会員による最初の総会である、第105回総会が、7月25、26、27の3日間、本会議講堂で開催された。

第1日目(25日)。午前中の新会員への辞令交付式に続いて、13時に総会が開会され、直ちに、会長及び両副会長の選挙が行われた。会員による互選の結果、会長には、第13期の会長であった近藤次郎第5部会員が再選された。また、人文科学部門の副会長には、大石泰彦第3部会員が、自然科学部門の副会長には、渡邊格第4部会員がそれぞれ選出された。選挙終了後、近藤会長から、「一生懸命務めるつもりなので、会員の方々の御協力をよろしく願いたい。」との就任のあいさつがあり、また、大石、渡邊両副会長からもそれぞれ就任のあいさつがあった。

総会終了後、直ちに、各部会が開催され、各部の役員である部長、副部長、幹事の選出が行われた。(第14期の役員については、別掲を参照)。

第2日目(26日)。10時に総会が開会され、始めに、近藤会長が、第13期の会長という資格で第13期の総括的な活動報告を行った後、3年間を振り返り特に印象の深いものとして、脳死問題に関する討議、ICSU 総会招致に関連する科学者の自由交流問題、学術会議の予算等について、その所感を述べた。続いて、会員推薦管理会報告として、久保亮五委員長の代理として事務総長が、第14期会員の推薦を決定するまでの経過報告等を行った。

引き続き、会長から3日目の総会で提案・審議する予定の「第14期活動計画委員会の設置について(申合せ案)」に関する各部での事前討議について並びに各常置委員会の委員定数の決定に基づく各部での委員の選出について、それぞれ各部へ付託がなされた。

総会終了後、直ちに各部会が開催され、前述の申合

合せ案の討議及び各常置委員会委員の選出等が行われた。

第3日目(27日)。10時に総会が開会され、会長から前述の「第14期活動計画委員会の設置について(申合せ案)」の提案が行われた。この申合せ案は、第14期の活動に関する基本的計画の立案を任務とする臨時の委員会を次の定例総会までの間、設置するという内容を内容としている。この提案は、その構成等に関する若干の討議の後、原案どおり可決された。

総会終了後、直ちに各部会が開催され、設置が決定された第14期活動計画委員会委員の選出等が行われた。

なお、この第14期活動計画委員会は、総会期間中に第1回の会議を開き、全会員を対象にした第14期の学術会議の活動に関するアンケートの実施を決めるなど、早速その活動を開始した。

第14期日本学術会議会員の辞令交付式等について

第105回総会に先立ち、第14期日本学術会議会員の辞令交付式が7月25日(月)10時35分から、総理大臣官邸ホールで行われた。辞令交付式は、まず、第1部から第7部までの会員の氏名が順次読み上げられた後、会員全員を代表して最年長者である山本正男第1部会員が竹下登内閣総理大臣の代理としての小淵恵三内閣官房長官から、辞令の交付を受けた。その後、小淵長官から、第14期会員に対する期待を込めた内閣総理大臣あいさつの代読があり、続いて、山本正男会員から、会員を代表して国民の期待に沿うよう努力したい旨のあいさつがあって、式は終了した。出席会員は190人であった。なお、第14期日本学術会議会員の発令は、第14期の始期である7月22日付けであるが、総会日程との関係で、総会初日の7月25日に辞令交付式を行ったものである。

26日には、午後の各部会終了後、18時から、小淵内閣官房長官主催による歓迎パーティーが本会議のホールで行われた。小淵長官のあいさつがあり、続いて、脇村日本学術士院長の代理としての石井良助学士院会員から祝辞があった。これに対し近藤会長によるユーモアに富んだ答礼のあいさつがあり、沢田敏男日本学術振興会会長の乾杯の音頭でパーティーが進められ、活発かつ友好的な歓談が行われた。

第14期日本学術会議役員

会長 近藤次郎(第5部・経営工学)
 副会長(人文科学部門) 大石泰彦(第3部・経済政策)
 副会長(自然科学部門) 渡邊 格(第4部・生物科学)

〈各部役員〉

第1部 部長 黒田 俊雄(歴史学)
 副部長 北川 隆吉(社会学)
 幹事 一番ヶ瀬康子(社会学)
 〃 肥田野 直(心理学)

第2部 部長 西原 道雄(民事法学)
 副部長 川田 侃(政治学)
 幹事 経塚作太郎(国際関係法学)
 幹事 山下 健次(公法学)

第3部 部長 島袋 嘉昌(経営学)
 副部長 大石嘉一郎(経済史)
 幹事 木村 栄一(商学)
 〃 則武 保夫(財政学・金融論)

第4部 部長 中嶋 貞雄(物理科学)
 副部長 田中 郁三(化学)
 幹事 樋口 敬二(地球物理学)
 〃 平本 幸男(生物科学)

第5部 部長 岡村 総吾(電子工学)
 副部長 高村 仁一(金属工学)
 幹事 市川 惇信(計測・制御工学)
 〃 藤本 盛久(建築学)

第6部 部長 江川 友治(農芸化学)
 副部長 中川昭一郎(農業総合科学)
 幹事 飯田 格(農学)
 〃 水間 豊(畜産学)

第7部 部長 小坂 樹徳(内科系科学)
 副部長 水越 治(外科系科学)
 幹事 伊藤 正男(生理科学)
 〃 岡田 晃(社会医学)

(注) カッコ内は、所属部・専門

「対外報告」について

本会議では、第13期になってから、その意思の表出の形態の一つとして、各部・委員会がその審議結果をとりまとめたものを、総会又は運営審議会の承認を得て、外部に発表する「報告」(通称「対外報告」と言っている。) というものができるようになった。ただし、この対外報告は、日本学術会議全体の意思の表出ではなくて、当該対外報告をとりまとめた部・委員会限りのものである。

第13期には、数多くの対外報告が総会又は運営審議会の承認を得て出されている。ここでは、すでに、この日本学術会議だよりで紹介されているものを除いた対外報告の題目のみを以下で紹介する。

- ・物理学研究連絡委員会報告—大型ハドロン計画の推進について
- ・化学研究連絡委員会報告—全国的視野に立つ化学の新しい研究体制について
- ・第5常置委員会報告—公文書館専門職員養成体制の整備について
- ・遺伝医学研究連絡委員会報告—「医学教育の改善に関する調査研究協力者会議最終まとめ」についての意見
- ・第4部報告—上級研究員制度(仮称)の新設について(基礎科学振興・充実のための一方策)
- ・第5部報告—工学系の大学における産・官・学の研究協力の在り方について
- ・生命科学と生命工学特別委員会報告—生命科学の研究と教育の推進方策について
- ・情報学、学術文献情報、学術データ情報研究連絡委員会報告—情報学振興総合機構の構想について(中間報告)
- ・商学研究連絡委員会報告—大学における商学教育の課題と方向
- ・電子・通信工学研究連絡委員会報告—通信工学の体系化に向けて